

日本生育外国人児童の小学1年時作文の計量的分析

—日本人児童との比較を通して—

工藤聖子（早稲田文化館日本語科） 三好大（東京学芸大学大学院 博士課程）

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

1. 研究の目的

日本生まれ、日本育ち（日本生育外国人児童）の作文力に関し、小学校1年時点の特徴を日本人児童や他校の児童との比較を通して捉える。本発表では、作文の特徴を、産出量と文構造の複雑さの二つの側面から分析した結果を報告する。

2. 研究方法

分析対象の作文は、A・B二つの小学校の協力を得て、ひらがな学習が終了した時点で収集した。テーマは全校遠足でいわゆる出来事作文である。A小学校（以下A校）は外国人が集住する地域にあり、50%強を外国人児童が占める。その大半が日本生育外国人児童である。B小学校（以下B校）には広域から児童が通学している（入学選抜あり）。作文数は、表1

表1 分析対象作文数

	F	J	合計
A校	51	42	93
B校	0	89	89

の通り、A校の外国人児童51名分で、その文化背景はベトナム24人、中国15人、カンボジア5人、ブラジル2人、フィリピン2人、ラオス3人である。日本生育（以下日F）が35人、母国生まれ（以下母F）が16人である。母Fの来日年齢は、6歳4人、5歳2人、4歳1人、3歳2人、2歳4人、1歳以下が3人である。B校には、この他、海外生活経験者が2人いたが、分析対象としなかった。

産出量は文字数と文数を、文の複雑さに関しては、平均文節数、複文割合、複文述語数（1複文に含まれる述語数）を調べた。さらに、従属節における接続形式に注目し、「～て」形式による接続（並列節）と、「～の」「～こと」形式（名詞節）の使用状況を調べた。その結果に関し、A校の日本人児童をJA、B校の日本人児童をJBとし、A校の日F、母Fを合わせた4群間での比較分析を加えた。

3. 結果

表2 分析結果 産出量と文の複雑さ

3.1 産出量

産出量は文字数・文数とも JB > JA・日F > 母F であり、母Fと日Fの差が見られた。また、JBとJAにも大きな差が見られ、学校間の違いが際立つ。

	文字数	文数	平均文節数	複文割合	複文述語数
日 F(35)	124.94	5.82	4.00	50.26	2.19
母 F(16)	94.56	4.25	4.73	68.33	2.28
JA (42)	125.31	5.23	4.71	61.03	2.30
JB (89)	306.45	10.51	6.96	57.78	3.33

3.2 文の複雑さ

平均文節数は、JBが他3群より明らかに多い。その傾向は複文述語数にもみられる。これらのJBの数値は、A校の調査結果（齋藤他（2014））では高学年に相当する。ただし、複文割合は母F

>JA・JB>日Fと、他の文構造の複雑さを示す数値とは異なる様相を見せている。

そこで複文を含む180作文について、従属節の形式と機能の特徴をみることにした。

3.2 従属節に見られる特徴

動詞・形容詞の「～て」形式による接続（並列節）と「～の」「～こと」形式（名詞節）に着目して分析した（表3）。さらに、「～て」の並列節（以下「～て」節）の機能別割合を調べた（表4）。「～て」節はJBが他3群に比べ出現が明らかに多く、JAと日Fは「～て」節と名詞節が同程度出現している。A校の作文に見られる名詞節には、「～のが楽しかったです。」「楽しかったのは～ことです」等の定型化した表現が多い。

表3 「～て」節と名詞節

対象作文数	一複文当たりの「～て」節	一複文当たりの名詞節
日F (30)	20.0%	24.2%
母F (14)	37.0%	14.6%
JA (40)	32.0%	30.0%
JB (89)	65.0%	6.0%

表4 並列節の機能別割合

「～て」節の機能は、日F・母Fで理由が多くを占める点が共通しているが、日Fはそれ以外、付帯・様態のみであるのに対し、母Fは、継起なども見られる。JA・JBには全機能が見られるが、JAは理由、JBは継起が高い。従属節の特徴として、形式面ではB校が「～て」節が多いのに対し、A校は「～て」節と名詞節の両方が見られる。また、日本人児童が多様な機能を持たせているのに対し、外国人児童は機能に偏りがある。

	継起	付帯・様態	手段・方法	並列	理由
日F	0.00%	36.84%	0.00%	0.00%	63.16%
母F	20.00%	6.67%	6.67%	0.00%	66.67%
JA	17.07%	21.95%	4.88%	14.63%	41.46%
JB	43.67%	10.76%	2.22%	6.65%	36.71%

4. まとめ

産出量と複文割合を除く文構造の複雑さの指標となる項目では、学校間の差が目立つ。一方同じ学校の児童でも、日本生育外国人児童が日本人児童・母国生まれの外国人児童に比べ、文構造の複雑化・従属節の機能の多様化で遅れている可能性が示された。

OECD (2007) では、社会的背景と数学的リテラシーの得点との相関で、移民の子どもは社会経済文化的背景指標で比較的不利な子どもが集まる学校に通っていることが多いと指摘する。本結果からも、作文力の発達において、日本生まれの2世が同じ学校で学ぶ日本人児童とも母国生まれの外国人児童（准1世）とも異なる特徴があること、学校による環境の違いが影響することが示唆された。支援内容・方法の検討においては、これらを考慮することが必要であることが確認された。

付記：作文収集に協力くださった2つの学校の先生・児童の皆さんに感謝申し上げます。

なお、発表者以外に菅原雅枝（東京学芸大学）が共同研究者として分析等を行っている。

【引用文献】

- ・OECD 編著 斎藤里美監訳（2007）『移民の子どもと学力 社会的背景が学習にどんな影響を与えるのか』明石書店
- ・斎藤ひろみ・畠田陽子・菅原雅枝・森篤嗣・阿部志野歩・北澤尚（2014）「日本生育外国人児童の作文力に関する調査」、『国際教育評論』No.11, pp53-64
- ・益岡隆志（1997）『新日本語文法選書2 複文』くろしお出版